

Title	人間科学とは何だろうか : ゆらぎの中での自己反省と自己組織化
Author(s)	徳永, 恂
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1989, 15, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4178">https://doi.org/10.18910/4178</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 人間科学とは何だろうか

— ゆらぎの中での自己反省と自己組織化 —

徳 永 恂

ただし書き

- (一) はじめに
- (二) 人間科学というタームについての歴史的  
警見
- (三) 人間科学についての通念の批判的検討
- (四) 注
- (五) 別添資料 1. 2. 3.

## 人間科学とは何だろうか

— ゆらぎの中での自己反省と自己組織化 —

ただし書き

以下の報告は、1988年10月に札幌学院大学が、新学部創設10周年を記念して、全国の「人間科学」という名を持った組織を持つ主要大学の関係者を招いて計画したシンポジウム、学術部会での基調講演（他に慶大 沢田名誉教授、文京大 水島教授）草案に若干の手を入れたものである。ただ学生を含む聴衆の性格からして、専門的な学術論議というよりは、むしろ人間科学という名のつく組織に属しておりながら、人間科学について明確なイメージを持ってない人々に、何らかのオリエンテーションを提供するという啓蒙的意図で行われた。そういう限定された意味しか持たないが、またそのかぎりでは何らかの意味を持つとも考えられるので、ここに収録をお願いした。

### （一）はじめに

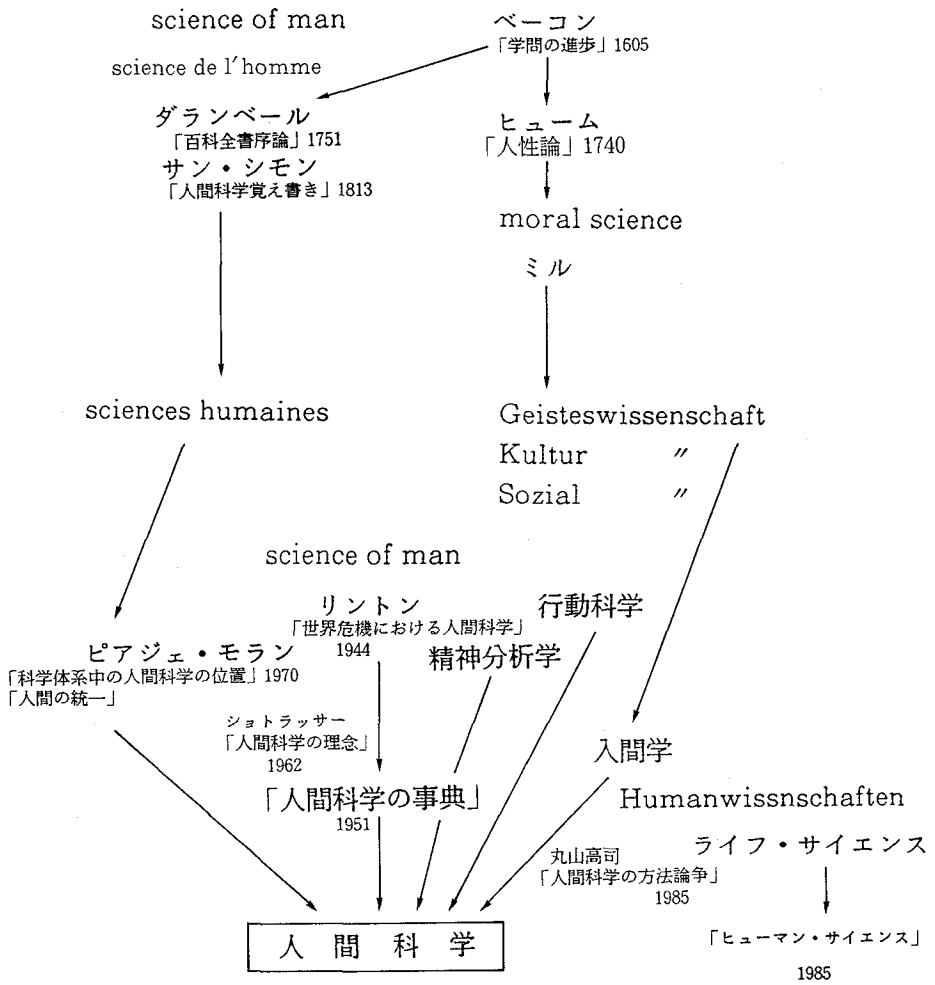
— 組織のシンボルと認識のシンボル —

「人間科学」という名稱は、日本ではなじみが薄く、20年ほど前に大阪大学に人間科学部を創るプランが発表された時にも、学問はすべて人間についての学問なので、ことさら人間科学などと言う学部の教師の顔が見たいなどと、週刊誌でからかわれたりしたものだ。しかし近頃では、学問的な面でも、制度的な面でも、ようやくこの名稱は定着し、住みついてきた感がある。とくに大学設置規準に、学部・学科の名稱として登録されたことも手伝って、各地に人間科学を名乗る組織が生れてきたことは周知のとおり。しかし率直に言って、人間科学という名稱は、さしあたり「組織シンボル」としては有効であっても「認識シンボル」としては明確ではない。もちろん、認識シンボルとして明確な線引きをしない方が、さまざまな異質的な分野を含む新しい分野を組織する上で、柔軟性を持つ、ということはある。しかし、だからといって、最近のように、たとえば早稲田大学のように、健康体育系を主眼とする学部が人間科学部を名乗るようなことになると、ある種の混乱と誤解は避けられない。認識のシンボルとしての人間科学というものを、もう少しはっきりさせる必要が出てくる。

そこで以下の報告では、第一に、今世紀の中葉に成立してくる人間科学の系譜と傾向を歴史的に、人間科学というタームの使用例に即して明らかにし、第二に、人間科学という名稱を聞いた時に、一般の人々がどういうイメージを思い浮べるか、そういう連想のいくつかを取り上げて、それを批判的に検討することを通じて、人間科学の特徴づけに何ほどかの寄与

をできればと思う。できれば、人間科学はいかにして可能か、といった抽象論でなく、現実  
にどのようにして人間科学の研究を進めたらいいか、具体的な提案を含む形で行いたい。先  
ず初めに歴史的な系統図と、取り上げる通念を示しておきたい。

A. 人間科学というタームについての歴史的瞥見



## B. ここで検討したい人間科学についての通念

通念 1 人間科学とは、これまで人文、社会科学が対象としてきた人間を、自然科学的方法で研究する学問である。

(方法的一元論の主張)

通念 2 諸科学は専門化のあまり、人間の全体像を見失ってしまった。人間科学はそれを回復しようとする。

(総合化の要求)

通念 3 科学の進歩は必ずしも人間に幸福をもたらさなかった。人間科学は人間の幸福の実現を目的とする。

(価値理念としての人間)

本報告では、以下、人間科学研究の歴史と現状を省みながら、第一テーゼには反対し、第二、第三テーゼには、基本的には肯定する線上で、しかし批判的にそれを限定することにした。

## (二) 人間科学というタームについての歴史的瞥見

「人間科学」(Science of man, Science de l'homme) というタームは、古くはグランベールの『百科全書序論』(1751)からベーコンの『学問の進歩』(1605)にまで溯ることができると言われている。しかし当時の Science は、まだ自然の秩序のうちに神の創造計画を見る神学的風土の中に置かれていたし、認識ないし知識という広い意味で使われていた。そういう知識を人間の(神ではなく)認識能力に由来するものとしたヒュームは『人性論』(1740)で science of man を強調された綱領の意味で使っているが、それはまだ学問一般と区別されていない。ただしその副題「推論の実験的方法をモラル・サブジェクトに導入する試み」は、後の方向を予示しているものではあるが。ほぼ現今の意味での科学概念に基づき、人間を対象とする「人間科学」を構想したのは、サン・シモンの『人間科学覚え書き』(1813)<sup>①</sup>であろうか。彼は基本的にはデカルト的な心身二元論を受け継ぎながらも、想像に基づく推量ではなく、事実の観察と合理的推論に基づく方法を人間に適用し、生理学と心理学を二本の柱とする「人間科学」を構想した。それは人間精神の進歩の尖端に立つものという高い抱負を帯びていたが、じっさいには未整理のまま、カバニスやコンドルセについての読書ノートといった文字通りの「メモワール」に終わった。

このように19世紀の初頭の一時期、脚光を浴びたかに見えた「人間科学」というタームは、その後の19世紀をつうじて、フランスでは一般的な「実証主義」の風潮に押され、イギリス

ではミルの「moral science」から、そのドイツ訳「Geisteswissenschaft」へと流れる諸科学の分化傾向をつうじて、学問史の表面からは姿を消していったと言えよう。それが再び姿を現わすのは、20世紀の中葉になってからである。

かつて私は拙訳、シュトラッサー『人間科学の理念』「あとがき」でこう書いたことがある。<sup>②</sup>

「人間の科学」(science of man) という名稱は、今世紀中葉の比較的早い時期から、アメリカなどで、人類学、社会学、心理学などを含めた新しい総合科学の理念として使われてきた。しかしアメリカにおいては、その後このことばは、どちらかと言えば行動科学という名稱の陰に隠れていったように見受けられる。それに対してフランスでは「人間科学」(sciences humaines) ということばは、今世紀中葉以後、人文・社会系の諸学についての新しい分類概念として、学問上、制度上、広く一般に使われるようになり、すでに根強く定着しているように見える。もともと sciences humaines ないし sciences de l'homme ということばは、一九世紀初頭以来の伝統をもつが、昔は自然の学に対する人間の学として、いわゆる「人文学」と区別されない形で使われていたようである。それが二〇世紀の中葉に、あらためて「人間科学」として登場した時には、おのずからそこに新しい意味合いが込められていた。人間科学は、イギリスの moral science (ミル) からドイツ流の精神科学 (Geisteswissenschaften) へ、という人文学の伝統と展開とを踏まえつつも、それとは一線を画し、それを発展的に吸収しながら、その後に蓄積された新しい経験の組織化をはかろうとする。ディルタイによって基礎づけられ、その後一般に流布していった「精神科学」は、「生」(Leben) という形で人間の独自性を捉えようとする意図をもっていたにもかかわらず、いぜん心身の二元論を奉ずる近世哲学の枠内にとどまり、また方法的には、一九世紀における歴史学を暗黙のモデルとして形成されたものであった。しかし二〇世紀中葉までに積んできた学問的、ないし前学問的経験からすれば、心身二元論の上に立つ「精神」という概念は、今日の人間をトータルに捉えるには狭すぎるし、歴史的方法、とくに文献学的方法が、人間研究の——少なくとも唯一の——主導的方法ではありえない。こうして二〇世紀前半に蓄積された新しい経験と、そこで開拓されたさまざまな方法に基づいて、人間を人間としてトータルに捉えるために、従来の諸学問の分類体系を再編成しようとする動きが起こってくる。人間科学ということばは、さしあたり、人文・社会系諸学の分類体系を再編成しようとするこのすぐれて現代的な、歴史的運動から生み出された象徴的表現なのである。したがって人間科学というものを、従来の既成の分類体系の中に引き戻して無理に位置づけて理解しようとする努力は空しい。今までの所、人間科学は、従来の分類体系再編への歴史的運動の表現であって、未だその運動は未完であり、新しい分類にまで到達していないからである。こういう胎動は、心理学・精神分析学・精神医学・人類学・社会学・比較宗教学・神話学・言語学・教育学・

等等の分野に多発的に発生し、しだいにいわゆる学際的な領域にまで問題化の地平を拡大しつつある。人間科学とは、さしあたり、このような一群の科学にたいする総称であるが、その活動領域は固定的・閉鎖的なものではなく、ピアジェが言うように「人文・社会科学と相蔽い自然科学と連なる」広大な領域にまたがると言っているであろう。このようになお未定形な運動にとどまるとはいえ、二〇世紀前半の新しい経験と、そこで獲得されたさまざまな方法に基づいて、人間としての人間をトータルに解明しようとする一群の学問——それを「人間科学」と名づけることは、まず五〇年代のフランスで定着し、その後急速に広まって、今や国際的規模で市民権を獲得しつつある。このような「人間科学」の成立は、二〇世紀における科学史ないし思想史の上で、ある画期的な出来事とさえ言えるであろう。<sup>③</sup>

日本では、戦後いち早くリントン、クラックホンらの『世界危機における人間科学』（1944）が訳され<sup>④</sup>、南博ら初期「思想の科学研究会」メンバーによる『人間科学の事典』が編まれているが、<sup>⑤</sup>アメリカ系のサイエンス・オブ・マンは定着したとはいいがたい。フランス系の sciences humaines は、かなりの業績が紹介されたにもかかわらず、日本語訳では、人文科学ないし人間の科学などと訳されたために、表にあらわれないでしまった。60年代以降、シュトラッサー、ピアジェ、<sup>⑥</sup>ロワイヨーモン研究センター<sup>⑦</sup>ガリマールの人間科学叢書<sup>⑧</sup>などの翻訳が進み、他方アメリカ系の臨床心理や行動学<sup>⑨</sup>またライフ、サイエンス的側面からの『ヒューマン・サイエンス』叢書<sup>⑩</sup>など、多方面からの研究が知られ、学問的にも制度的にも、定着し始めた感がある。

にもかかわらず「人間科学」というタームは一般にはなじみが薄く、いくらかのとまどいが感じられる。そこで現在、一般に抱かれていると思われる人間科学についての通念ないし先入見のいくつかを取り上げ、それを批判的に検討することにしたい。

### （三）人間科学についての通念の批判的検討

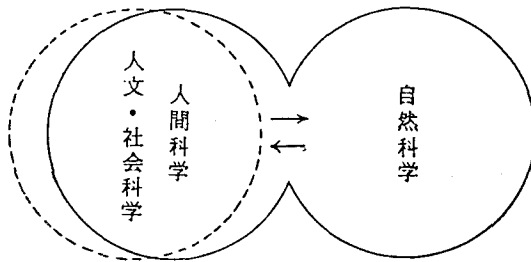
通念1 人間科学とは、これまで人文、社会科学が対象としてきた人間を、自然科学的方法で研究する学問である。（方法的二元論の主張）

自然科学と人文・社会科学とが、領域的、方法的にどのように区別されるかについては種々の問題がありえようが、自然科学的領域からえられた特定の認識理想や方法モデル（たとえば観察・実験、数学的言語による記述、法則化など）を唯一のものとして人文・社会科学に要求する「自然科学的方法一元論」を人間科学に関して主張することは、歴史的にも少なく、現実にも承認をえていないように思われる。自然科学的方法の持つ比重は、行動科学が人間

科学の中でどのような役割を果たすか<sup>⑪</sup>に依存している。

他方歴史学とくにテキスト解釈を方法モデルとして形成された精神・文化科学の方法的独自性の主張（たとえば解釈学的方法、説明に対する理解など）は、自然科学的方法一元論に対して自律性を主張するに過ぎないと言えようが、自然科学との間に垣根をつくることによって、自分の庭園の中に自足し、その中で方法一元論に陥る危険なしとしない。<sup>⑫</sup>

私は人間科学というものを、領域的には——ピアジェにしたがって——「人文・社会科学と相敵い、自然科学に対して開かれた形で接する」ものとして考えたい。



方法的には、方法は領域に依存するという考えのもとに、自然科学的一元論だけでなく、あらゆる種類的方法的一元論に反対したい。そして、同一の領域も複数の接近を許すという考えのもとに、人間科学に関する「方法的多元論」をとりたいと思う。

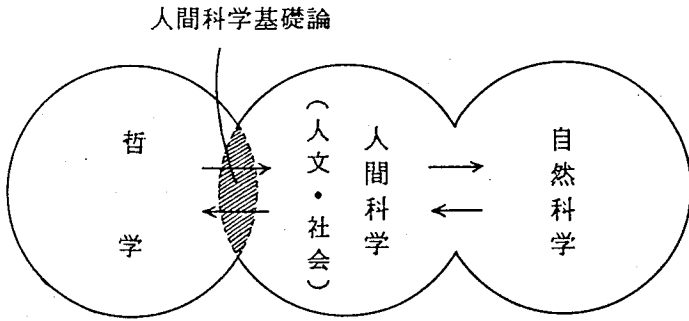
人間科学と自然科学との関係は、國境紛争ではなくて、相互の自律性を認めた上での共同作業、場合によっては緊張に充ちた共同作業だろうか。時にはそれは相互侵入であり人間についての自然科学がありうると同様に「自然についての人間科学」もありうるはずである。<sup>⑬</sup>

シュトラッサーは、初期の行動主義（ワトソン）を念頭に置きつつ、「行動科学の終る所から本来の人間が始まるのだ」と言っているが、問題は、國境線の線引きをすることではなく、ポール・リクールが言うように「境界領域を相互承認する」<sup>⑭</sup>ことであり、積極的にそこへ出て行く事である。

同じ事は、人間科学と哲学との関係についても言える。

人間科学が、「認識することにおいて主体が対象を変化させ、対象が主体を変化させる」というピアジェのいわゆる「人間科学的循環」という難点をかかえ、それに基く独自の「客観性」の基礎づけを必要とするとすれば、人間科学は、解釈学的哲学による認識論的反省を欠く事はできない。反科学的な哲学と反哲学的な科学主義の両面を否定しつつ、人間科学と哲学との生産的な対話をはかることが必要なのである。



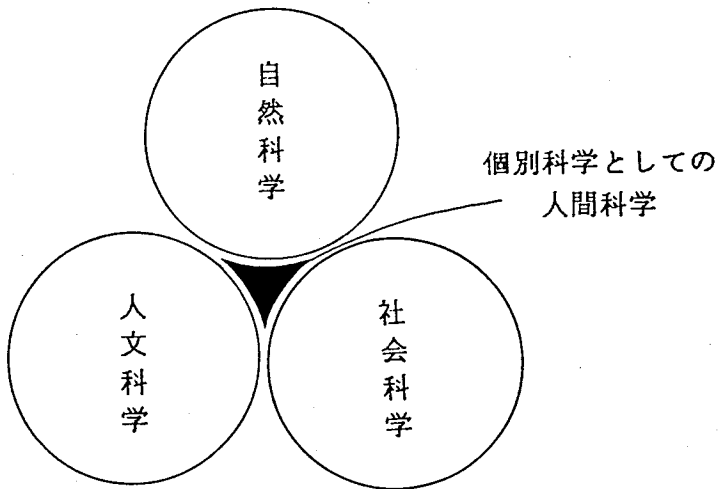


人間科学を端的に「人文・社会科学の総称」と言い切る丸山の規定に従えば、その哲学と自然科学とへの関係は、こういう形で図示することができようか。<sup>⑮</sup>

通念2 諸科学は専門化のあまり、人間の全体像を見失ってしまった。人間科学はそれを恢復しようとする。(総合化の要求)

これは諸科学の専門化に対する包括的な反省を喚起している点では正しいが、人間の全体像をどういふものと考え、またそれをいかにして捉えていくかという点に関しては多くの問題を含んでいると考えられる。

諸科学の分化・細分化によって取り残された領域についての「専門学科としての人間科学」というものも考えられる。



しかしこれは専門的分化のもたらした空白の補充であって、総合をめざす包括的反省の要求を充すものではない。

諸科学の専門化傾向は、分業による能率化という観点からも必要かつ必然的な傾向であろう。しかし「対象に対する方法の優位」(アドルノ)という思考法が、無責任にそれに拍車をかけている。つまり、自前の方法でスマートに処理できそうな対象は、予め切り捨てるか、他の科学(もしくは哲学)に押しつけるという思考法である。こうして引き取り手のない領域が塵捨場に山積する。

「方法の優位」によって拡大される空白状況を打破するために必要なのは、先ず対象つまり人間への強烈な関心である。(認識に対する関心の先行)。現実のあるがまゝの人間のすべてに対する強烈な関心。

しかしそういう直接的な関心が理論によって媒介され、学問的な認識に高められて組織されていく仕方には、もちろん多くの問題がある。一頃稱えられた「全体的人間」というようなロマンティックなスローガンは別としても、そもそも「全体性」というカテゴリーがどう考えられるべきか、とくに人間に関してどう適用されるのかについては、哲学をはじめ諸科学の中で、さまざまに論議されてきた。(部分の加算的總和、目的論、合法則性、弁証法的總合、均衡論、システム、ゲシュタルト、ホーリズム、ホロン、etc) 60年代に行われたフランクフルト学派と批判的合理主義の間の「実証主義論争」においても、全体性問題は大きな論点の一つとなっていた。<sup>⑩</sup> ここではもちろんこの問題に深入りすることはできないし、また人間科学にとって、とくに全体性問題に態度を決めることが具体的研究の前提をなすとも思われぬ。そこでここでは、人間科学の知見が、相対的に、より拡大深化されるためにとるべき現実的方策と理論形態に、話を限定することにしたい。

人間科学という名を持った組織に属する研究者は、既成の各学問分野で訓練を受け、それぞれの側面から人間科学の研究を志向してきた。この態勢はプラスの側面を持ち、今後とも維持すべきである。

人間科学の研究は、数箇の比較的近い専門領域に属する研究者が、特定の「問題」について随時プロジェクトチームを組む、という形で推進されることが望ましい。その「問題」は、外から実践的課題として迫ってくる場合もあるし(リントン)、内から理論的に要請されてくることもある。(モラン)<sup>⑪</sup>

そういう研究の理論的形態・規模は「中範囲の理論」となろう。中範囲の理論とは、もと経済学の分野から由来するが社会学者、マートンとともによく知られるようになった。<sup>⑫</sup> それは、個別的調査研究によって蓄積される小作業仮設と、広い妥当性範囲を要求する斉一性命題ないし巨大な概念罫式の間にあつて、中範囲の普遍性をめざすとともに、兩者つまりケース・スタディとグランドセオリーとの媒介をはかろうとするものである。その具体的例としてマートンは、リファレンス・グループ論、役割理論、逸脱行動論などをあげている。この提唱には、アドルノなどからの批判もあるが、人間科学の研究には、依然として有効で

あると思われる。先のプロジェクトチームによる共同研究のテーマとして、たとえば、エコロジー、文明論、精神分析学、コミュニケーション論等があげられる。ここにあげた前三者は、環境問題、文化の自然的基礎、歪められた内なる自然等の問題に関する点で、先に述べた「自然の人間科学」に属すると考えられる。コミュニケーション論はこれとはやゝ異なるが、情報理論あるいはハバーマスの「コミュニケーション行爲論」と結びついて、中範囲の理論の拡大への可能性を宿していると言えよう。

マートンは40年代のアメリカ社会学における瑣末な調査至上主義と空虚な哲学的思弁や「一般理論」の同時克服を目指して中範囲の理論を提唱したが、ケース・スタディとグランドセオリーを切り捨てることでなく、両者を媒介することによって両者を活性化しようとしたのであり、人間科学についても同じことが言える。

全体的人間像とは、さしあたり複数の中範囲の理論によって多面的重層的に構成されていくべきものと思われるが、それはグランドセオリーを排除するものではない。事実最近でも「人間科学におけるグランドセオリーの復権」が唱えられている。人間科学は「人文・社会科学と相敵い、自然科学と接しつつ開かれている」と同様に、哲学とも開かれた関係を保ち、多くの知見を得なければならないであろう。

通念3 科学の進歩は必ずしも人間に幸福をもたらさなかった。人間科学は人間の幸福の実現を目的とする。(価値理念としての人間)

この通念も、科学の進歩が必ずしも人間にとって好ましい結果を生み出さず、むしろ非人間化の傾向を持つこと、そういう現状への反省であり、批判であるかぎり、正しいと言えよう。事実、科学の進歩が社会の進歩と伴わないという矛盾の意識は、サン・シモンの古典的人間科学の基本動機でさえあった。しかし人間科学の目的は人間の幸福にあると断言することには、いささかの抵抗を禁じえない。なぜなら、そういう主張は、一般的ヒューマニズムの空虚なスローガン(事実これは筑波科学万博のスローガンであった)でないとするれば、いかにも美名であり、そしてあらゆる美名には、ある種のいかがわしさがつきまとうからである。この点について多少のコメントをつけ加えておきたい。

第一に、人間科学は、その一部分、あるいは作業過程の一部を除いて、価値問題と無関係ではありえない。しかし科学の名において、特定の価値——たとえそれが人間という価値であっても——を安易に主張することはできない。

にもかかわらず、それが主張されるとすれば、それは「イデオロギー」(=虚偽意識)になりかねない。「人間のために」というスローガンが、その内部の対立、矛盾を蔽い隠し、特定の利害への奉仕に供される場合にはとりわけそうである。アドルノがゲーレンとの対

談（1965）において社会学を人間科学に入れることを拒否したのも<sup>①</sup> そういう配慮からであった。現実にも人事や労働における「人間化」と呼ばれる諸研究に見られるように、人間科学が無意識的にイデオロギーと結びつくこともなくはない。

第二に、しかし人間科学は、価値理念としての人間という考えを手離すことはできない。ただそれは積極的、肯定的な主張としてよりは、むしろ否定的な批判の原理として発現してくるものではなかろうか。人間の幸福と言うより、むしろ人間のディグニティが犯される場合に、それへの対抗原理として揚げられるものではなかろうか。かつてシェーラーの哲学的人間学が、第一次大戦後における人間観の危機から生み出されたように、40年代以降の人間科学は、アメリカにおける人種的、文化的葛藤を踏まえてのアイデンティティ・クライシス、第二次大戦、ナチス、原爆等が打ち明けた人間そのものの危機の経験に、その現実的根を持っていたのではなかろうか。人間科学が人間の幸福を目的とし、価値理念としての人間を唱導するとすれば、それは科学の進歩が必ずしも人間に幸福をもたらしていない、という事実を認識し、それに対して反省をくわえ、無反省に先に進むとする勢いを批判する。そういう形で否定的に発現するのではなかろうか。

この意味では私は「人間科学は人間についての科学ではない。それは科学の人間化の要求の上に成り立つ」というシュトラッサーのテーゼを支持したい。人間科学は「人間的科学」（竹内啓）<sup>②</sup>の名において、一方では、普遍化、形式化、数量化に先走ろうとする科学、そういう科学の「物神化」としての科学主義を批判し、他方では、その半面としての決断主義、オプスキュランティズム、非合理主義を批判するという危い道を通して動揺しつつ進む。

人間科学の位置は、既成事実を後から分類する形では定められない。それは尚現在進行形のものとして、模索し先取りされた可能性として試行を続けている。

この報告の副題が、いささか象徴的意味をこめて「ゆらぎの中での自己反省と自己組織化」とされた所以である。

## 注

① Saint-Simon; M'emoire sur la science de l'homme. 森博訳

「サン・シモン著作集」第二巻 恒星社厚生閣 1987

② S.Strasser; Phänomenologie und Erfahrungswissenschaft vom Menschen 1962. 徳永・加藤訳「人間科学の理念」新旺社 1978.

③ この文章は、文学部の学問理念に対して人間科学部のそれを際立たせるという文脈で書かれているので、それなりの一面性と気負いが感じられるが、基本的には正しいと思う。

④ 資料1を参照

⑤ 資料2を参照

- ⑥ Jean Piaget; The Place of the sciences of man in the system of science .1970.これはユネスコ編の「社会科学および人間諸科学の研究の主要動向」(英・独・仏語版あり)の序説として書かれたもので、波多野訳「人間科学序説」1976.岩波書店がある。
- ⑦ 別添資料3を参照
- ⑧ この大部のシリーズは哲学に重心が置かれている所に特色がある。日本では同じ傾向のものとして白水社から出版された「人間科学叢書」があり、ジュリアン・フロイントの「人間科学の諸理論」(竹内他訳 1974)などが含まれている。
- ⑨ たとえば、水島恵一「人間科学入門」有斐閣 1974. 樋口伸吾「人間科学への道」平河出版社 1979.
- ⑩ 「ヒューマン・サイエンス」全5巻. 中山書店。
- ⑪ 後記シュトラッサーのように、特定の間観に基いて、行動科学の間観を斥ける考え方もありうるが、特定の専制的科学観をとらないかぎり行動科学的手法が人間科学的知見に寄与する面は誰も否定できないだろう。
- ⑫ この点では先に引用した(注2)シュトラッサー訳の「あとがき」を参照されたい。
- ⑬ これについては後述、尚丸山高司他編「知の理論の現在」世界思想社、1987、中の村田純一論文「知の構造転換」を参照。
- ⑭ 前記シュトラッサー「人間科学の理念」のフランス語版序文を参照。
- ⑮ 丸山高司「人間科学の方法論争」勁草書房、1985。
- ⑯ 「ドイツ社会学における実証主義論争」については、徳永「社会認識における全体性問題」(岩波講座、哲学12巻、1968)、「実証主義論争」(朝日ジャーナル1979. 9. 28日号)等を参照
- ⑰ 前記、別添資料1. 3.を参照  
リントンの試みは「文化とパーソナリティ」という学際領域の研究でありつつ、当時のアメリカ社会の危機の打開という強い実践的要求に裏打ちされている。他方モランらのロワイ・ヨーモン人間科学研究センターの共同研究は、人間の統一像(unite)を求めつつ、「生物学的不変要因と文化的普遍要因」との関連を尋ねるという限定された作業仮説の上で遂行された。前者は文化人類学・社会学・心理学。後者は生物学と人類学との共同プロジェクトに基づく。
- ⑱ 「中範囲の理論」については、Merton; Socialtheory and socialstructure · 1949. 森他訳. 青木書店
- ⑲ J Habermas:Theorie des kommunikativen Handelns 平井・徳永・脇・他訳  
「コミュニケーション行為の理論」上・中・下・未来社
- ⑳ オニール「グランド・セオリーの復権」加藤・藤沢訳. 産業図書. 1988.
- ㉑ Graze;Adornos Philosophie, 1974. Suhrkamp. の附録として収録されている。
- ㉒ 竹内啓;「近代合理主義の光と影」新旺社. 1979.

以下注17で指摘した共同プロジェクトの例として今では手に入りにくい三つの資料を示す。

## [資料1]

「世界危機に於ける人間科学」上, 下巻 ラルフ・リントン編 池島重信 監訳 解説  
蒲生正男 叢書 名著の復興 新泉社 1950. (The Science of Man in the World Crisis,  
Columbia Uni. Press, 1945)

## 緒言

現在の世界情勢における危機は書物の洪水をもたらした。書物のおおかたは世界再組織案に関するものである。本書の目的とするところはずっとひかえめである。世界再組織の計画には科学の与えうるあらゆる助力が必要なことは誰でも認めるだろう。同時に、そこに含まれる問題は複雑多岐であり、その解決は多数の分野の科学的研究者の協同によってのみ可能となる。これまでも見られたように、一科学の新発見や新技術が他の科学の常備の実働装置の部分となるには一世代かかるのが普通である。そうした発見が常人に熟知され、常任の思考に大きな影響を及ぼすようになるにはよほどの時間が必要である。本書はこの間合を短縮しようとする試みの一つなのである。本書は科学者および計画家と一般公衆との双方に宛てて書かれている。一般公衆の協力なくしては、いかなる計画も成就されるものではない。

人間科学は最新の科学であって、その知識の基礎はきわめて急速に増大した。ためにその発見の多くはまだ他の分野の科学者を動かすところまでいかず、局外者に対してはなおさらである。同時に、発見のうちのあるものは、必至と思われる新世界秩序の知的計画とそれの可能な実施との双方に最大の重要性をもっている。そのような秩序を作る者は、その材料である人間の可能性と限界を理解しないならば、失敗の運命は避けられない。これに劣らず重要なのは、長年月にわたって作用する趨勢に関する知識と、専門化が発生前に予見し、過激な行動を要する鋭化を未然に認識できるような問題に関する知識である。最後に、以上の要因をことごとく考量した計画であっても、適切な技術なくしては成功はおぼつかない。以上の点のいずれにも人間科学はなにかの助力を提供することができる。

本書の準備に際して、刊行者は紙幅と職員の両方に関して、若干戦時の制限に逢着した。この分野の若い科学者のきわめて大きな割合が政府の御用に従い、彼らの多数が軍務に服した。然るべき考慮の後に、本書を、科学の鎮定した内地というより科学の前哨である研究の辺境からの報告とすることに決定した。その結果、状況が別ならば当然十分に包含したに相違ないはずの各種の主題を除外することになった。すべて前以て十分に知られている諸事実は軽く通過され、すでに広く認識され論議されている各種の問題は省略された。かようにして、普通の読者は、人間の起源と進化との基礎的事実を知り認めているのはもちろんのことと思ひ、それには紙幅を費やさなかった。しかし、人種に関する我々の最近の知識の大部分は常人に及んでいないのであるから、これはやや詳しく扱った。さらに、ユダヤおよびニグ

ロ少数民族問題は特別には扱わなかった。誰でもこれらの問題は特別に扱わなかった。誰でもこれらの問題の存在は知っているし、これを扱った文献は多数にのぼっている。これらは一般に少数民族集団問題に関する我々の新知識のために不問に附された。他方、アメリカ・インディアンをどう扱うという漠然とした問題は、そういう問題の存在することを大抵の常人はほとんど気づいていないから、かなりの紙幅を与えられた。そういう選択がある方面に批判を喚起することはたしかであるが、本書は省略したものでなく包含したものを基礎として判定されることが望ましい。(以下略)

ラルフ・リントン

一九四四年八月 ニューヨーク コロンビア大学人類学部

## 目次

人類学の範囲と目的 — ラルフ・リントン

社会と生物学的人間 — H. L. シャピロ

人種概念 — W. H. クログマン

人種心理学 — オットー・クラインバーク

文化概念 — クライド・クラックホーン

ウィリアム・H・ケリー

社会諸科学における操作用具としての基礎的パーソナリティ構造概念 — エイブラム・カーディナー

文化の公分母 — ジョージ・ピーター・マードック

文化変化の過程 — メルヴィル・J・ハースコヴィッツ

文化変容の社会心理学的側面 — A・アーヴィング・ハロウェル

世界現状の文化的展望 — ラルフ・リントン

世界資源の現状 — ハワード・A・マイヤホフ

人口問題 — カール・サックス

変化するアメリカ・インディアン — ジュリアン・H・スチュアート

植民地の危機と将来 — レイモンド・ケネディ

マイノリティグループの問題 — ルイス・ワース

植民地行政における応用人類学 — フェリックス・M・キーシング

インディアン主義政策の考察 — マニュエル・カミオ

現代文明社会に適用されたコミュニティの研究と分析の技法 — カール・Cティラー

新しい社会的習慣の習得 — ジョン・ドラード

コミュニケーション調査と国際間の協力 — ポール・F・ラザースフェルド

国家主義、国際主義と戦争 — グレイソン・カーク

解説 — 蒲生正男

[資料2]

「人間科學の事典」(*Dictionary for the Science of Men*)

編集、思想の科學研究會、青山秀夫、阿部行藏、岡本太郎、南 博、1951、河出書房。

序文

十九世紀から二十世紀にかけて、學問の世界が、その幅と深さを加えたことは、だれも疑わない。

自然科學も社會科學も、いよいよ、専門的に分科して來たし、また各々の分野で、研究されたデータは、急速に豊富なものとなつた。

所で、そのように廣がりと量の上で、ぼう大になつて來た學問が、人間の生活と、どのように結びついて居るかを考えると、多くの疑問と共に、不安の念が起つて來るのである。

第一に、學問の、いわゆる「進歩」が、果して、人間を幸福にする方向にのみ働いて居るかという疑いがある。

自然科學と社會科學とが、足並をそろえていないことは、多くの人が指摘して居る所である。

しかし、普通に、その事情は、近年における自然科學のすばらしい發展に對して、社會科學が追い付いて行けないからである、というような、漠然とした形で表現されて居る。所が、問題は、二つの領分の間、へだたりがある、ということではない。實際、社會科學が、自然科學に對して、「おくれを取つて居る」というのからして、變な話である。

どうして、質を異にして居る、二つの領分を、どつちが進んで居る、おくれで居るといつて、くらべることが出来るだろう。そんな比較がまちがつて居るのである。

それで、自然科學と社會科學との足並がそろわない、と云うのは、その間に、一致した目標や、方向が立つて居ない實情を指すのである。

つまり、一言で云うと、自然科學と社會科學が、各々、勝手な一人歩きをして、肝心な共通の地盤が、しつかりして居ないのである。

そうしてこの共通な足場こそは、人間と彼の幸福なのである。

自然科學は、元來、人間が、自然の環境に處する際、魔術的な方法から脱却して、技術の採用へと向うための、より所となる理論であつた。それが、今日では、逆に技術へ服従し、それと共に、人間をもつぱら機械化するための理論になつてしまつた。

近代の戦争は、ますます機械にたよるようになり、人間は、武器の部分品として、爆彈を



運び、落すための機会としてのみ役に立って居る。技術が人間を非人間化して来るのである。

自然科学は、もう一ぺん、人間、彼自身についての科学から出直さなくてはならない。これが、われわれの考える人間科学の、自然科学的な側面となるのである。

社会科学の発展を考えて見ても、同じようなことが云える。

社会科学は、人間たちが、彼らの作り上げ、住みついて居る社会の環境に對處するための、さまざまな工夫の理論である。それが、現在では、逆に、一定の社会機構へと人間を縛りつけ、屈服させるための、理論になって来た。

社会は、その中に住む人間に對し、強大なマス・コミュニケーションの力を通じて、彼らを日々もつぱら受身な、自ら考える力を失った機械に化して行く。社会が、人間を、非人間化して来るのである。

ここで社会科学も、今一度、人間の一人一人について思いやりのある、親切な學問に立ち戻らなければならない。これが、人間科学の、社会科学的な側面である。

もちろんわれわれは、自然科学と、社会科学が、各々の分野で、今日までに、努力して層々と積み重ねて来たデータと、理論とをどこまでも尊重しなければならない。

しかし、問題は、すべての學問を、今一度、血肉のある人間の中を通過させて見ることにある。

この事典は、自然と社会についてのさまざまな學問や考えの成果を、いろいろな専門と、思想的立場のわれわれが、自由に解釋し、要約して居るのである。

しかし、われわれは學問を人間中心の立場に引きもどすという目的ではみんな一致して居るのである。

人間科学は、雑炊（ゾウスイ）であると、そしる人があつてもかまわない。けれども外觀美しくて實は内容貧寒な「體系」の菓子よりは、身體を温めてくれると思うのである。(南博)

### [資料3]

「基礎人間学」〔上, 下〕(1979, 平凡社)

*Centre Royaumont pour une science de l'homme*

*L'unite de l'homme* 1974。

統合的人間像をもとめて —

ロワイヨール人間科学研究センター, 監修—エドガール・モラン マッシモ・ピアテリ＝  
パルマリーニ

目次

全体への序言

第一部 霊長類から人類へ ― 連続と断絶

猿との対話

記号のダイナミクス

社会的不変要因

霊長類の生物学的統合性と人間化の基盤

人間行動学に向けて

第二部 人間の脳とその普遍要因

学習とは何か

夢とその機能

認識理論と観察の認識論

自己組織化と認識

第三部 基礎人類学に向けて

人類学の開放

生物人類学の開放

システムおよびサイバネティクスの開放

人類社会学的単一性

既成の學問を超えた考察

第四部 人間科学・倫理・社会

## WAS HEISST DENN "WISSENSCHAFT VON MENSCHEN"?

Makoto TOKUNAGA

Heutzutage ist die Vermehrungstendenz der verschiedenen Universitätsorganisationen namens "Wissenschaft von Menschen" (Fakultät, Fachbereich, Forschungsinstitut u.s.w.) eine bemerkenswerte Strömung in Japan. Dieser Name nun hätte zwar die Gültigkeit als Symbol der Organisation, aber noch nicht die bestimmte Definition als Symbol der Erkenntnis. Die Absicht dieses kleinen Aufsatzes besteht gerade in der Klarmachung des Begriffs "Wissenschaft von Menschen".

Im ersten Teil ist die geschichtliche Genealogie von Sprachgebrauch dieses Begriffs seit Saint Simon behandelt. Der zweite Teil will diesen Begriff inhaltlich erklären und die Haupttendenzen charakterisieren. Dazu möchte ich nicht direkt durch die Anzeige der Idee, sondern auf einem Umweg durch die kritische Prüfung der drei populären stereotypischen Meinungen über "Wissenschaft von Menschen" beitragen.

- 1) Der Behauptung von dem "methodologischen Monismus" möchte ich den "methodologischen Pluralismus" entgegenstellen.
- 2) Für die Forderung zur Synthetisierung möchte ich, auf dem praktischen Standpunkt, "the theory of middle range by project teams" vorschlagen.
- 3) Von dem Postulat der "Humanisierung der Wissenschaft" möchte ich — mutatis mutandis — seine Verwirklichung wünschen.